

高橋英夫編「志賀直哉随筆集」岩波文庫 1995年10月16日刊を読む

ナイルの水の一滴

人間が出来て、何千万年になるか知らないが、その間に数えきれない人間が生れ、生き、死んで行った。私もその一人として生れ、今生きているのだが、例えていえば悠々流れるナイルの水の一滴のようなもので、その一滴は後にも前にもこの私だけで、何万年^{さかのぼ}溯っても私はいず、何万年経っても再び生れては来ないのだ。しかもなおその私は依然として大河の水の一滴に過ぎない。それで差支えないのだ。

〔昭和44年〕

P.360

〔コメント〕

志賀直哉の晩年、84歳の心中を表したエッセー。無私の運命観。

- 2009年5月26日林明夫記 -